

今回もたくさんの学校に参加して頂き、ありがとうございました。参加作品数は、中学校の部26曲、高等学校の部・団体部門44曲、ソロ・デュエット部門19曲と多数でした。長い時間をかけて創作し、工夫を重ねて練習してきた作品を通じて、全国のダンス愛好者が交流し切磋琢磨するこのコンクール。出演前に「がんばろうね！」と掛け合う声や、客席で他校の作品を食い入るように見つめる姿から、皆さんの集中力や向上への想いを強く感じる時間となりました。コロナ前と変わらぬ盛況に、審査員一同、大変勇気づけられました。

6人の審査員が特に皆さんに伝えたいと考え話し合ったことを総評としてまとめました。大会当日の閉会式では短めにお話したのですが、全編をあらためてこの場でお届けします。大会やダンス活動への取り組みを振り返り、今後に役立てていただければと思います。個々の作品に対する講評は別途お届けいたしますので、楽しみにお待ちください。

【審査の観点と全体の印象】

審査員は「身体がよく訓練され、鍛えられているか」「主題にふさわしい表現が行われているか」「作品の展開・構成に工夫が見られるか」「作品全体が独創性にあふれ、何らかの魅力があるか」「総合的な完成度の高さ」の5つの観点で評価をしました。

@テーマ：どの作品からも創作の熱意が伝わってきた上、とてもよく練習してあることがわかりました。社会問題や日常生活のひとコマ、また文化や自然への畏敬の念、個々人の感覚へのこだわりなど、多様なテーマ設定が見られ、皆さんの関心の幅の広さを頼もしく感じました。

@オリジナリティ：テーマから導かれたイメージの核を絞り込み、それを表現しようとする動きと構成・展開の研究をより深く行い、首尾一貫して独自の世界を創り出した作品が、高い評価を受けていました。こうしたグループは楽曲の特徴をもよく研究しており、これを動きの表現と入念に結びつけているようです。一方で、発想は大変面白いけれど、そしていくつかの独特の表現を見つけていたけれど、途中で焦点がぼやけてしまったり、よく見るパターンの展開へと進んでしまったりした作品は、得点が伸びませんでした。こだわりが見える作品であれば、多少の失敗も魅力に変わっていきます。諦めずに、隅々まで「私たちがらしい」を探ってください。

@ユニゾン：大人数のユニゾンは、その力強さ、見るものに訴えかける力、そしてなによりグループの凝集性を高める効果が大きいのですが、作品全体の流れの中でそれが本当に必要な展開で行われてこそ、効果が発揮されると思います。しかし、多くの作品で、お決まりのパターンのようにユニゾンが置かれていて、そこにある必要性が明確でないように感じられました。なぜそこで全員で踊るのか、というところも考えながら、空間構成（グループ配置）を工夫したりすると、作品のスケール感が大きくなったり、作品の流れにメリハリが生まれやすくなります。そういったことが、「主題にふさわしい表現」「独創性」となって作品の深みが生まれると思います。

@身体や動き：新しい技術や素敵な動き方を取り入れて踊りたい気持ちはよく理解できるのですが、この興味のみが先行してしまうと、動きが表現にまで高められず、せっかくの作品テーマやイメージの力が削がれて、作品の魅力を打ち消してしまいます。

@化粧や衣装、小道具：独特の化粧や衣装、小道具を導入している作品も多くありましたが、せっかくなのに活用しきれていない、かえって印象や動きを妨げていた、という作品も散見されました。特に衣装や道具は、素材や形状によって動き方が変化しますので、実際に着用し、手に持ってたくさん動いて研究してから動きを作って行き、そうして決定した使い方を丁寧に徹底すると、作品の世界観をさらに強調してくれます。

@タイトル：難しい言葉遣いのタイトルがいくつかありました。解説文やサブタイトルも実際の動きの表現と遠いという場合、その背景や内容そのものをダンサーたち自身の力で咀嚼できていたか気になりましたし、観る側がイメージをわかせるべく損をすることもあったと思います。

【中学校の部】

- 少しずつ高校生の作品との差がなくなっている印象で、テーマ、表現技術ともにレベルが高まっています。一方で、それだけに、どこかで見たことのある動きや場面展開が増えている印象です。年齢層にあった理解で表現を一步先に進められると良いですね。そのためには良い作品をたくさん観賞して比較研究し、自然な動きの良さを見る目を養うことも大切です。
- リフトやアクロバティックな振りには空間を広げてくれる効果があります。ただし、成長期に見よう見まねで不用意に難しい技に挑戦すると、大きな傷害に結びつく危険もあります。大好きなダンスを長く続けてゆくためにも、基本の体づくりをまず大切にしてください。背中や体幹の動きを鍛えることや、体重の移し方、相手との関わり方に敏感になることがこれに含まれます。プロのダンサーでも特に注意を払ってこれらを練習、調整するものです。挑戦したい技が見つかったら、慌てず、まずそれができるための体力や体の使い方を確かめる過程を大切にしましょう。そうして基礎を固めることができると、表現したいことに身体が自由についていくようになっていきます。
- 衣装や小道具を考案する際には、イメージを大事にしながらも、動きをいかす衣装、衣装がいきる動きを研究することが必須です。道具や衣装が動きの邪魔となっている残念な場合も見られました。
- 明るく希望を感じさせるテーマの作品もあり、爽やかな気持ちになって鑑賞することができました。ただ、大変良い動きをしていたのに、「つくった笑顔」が、自然な身体表現の魅力を半減させていたグループも多くありました。表情は自然に溢れてくるものですから、顔を作って練習するのではなく、自然とその表情が溢れ出てくる練習ができると良いですね。
- 使用音楽の編集の仕方に大きな差がありました。曲の入り（フェイドインやカットイン）、終わり（フェイドアウトやカットアウト）、曲と曲の繋ぎ目（クロスフェイドなど）など、それぞれにブツブツと切れてしまったり、雑音のように切れ目の音が入ってしまったり、ということがあると、せっかく良く動くことができ素敵な表現に仕上がっていても、現実世界に引き戻されてしまって興奮め、ということにもなります。機材や技術の問題もあるかもしれないので、学校内外におられる音楽の専門家や、機械に強い方との協力関係も大切かもしれません。

【高校の部】

- その作品ならではの動きを見つけて追求できていて、お見事！と感じられた作品がありました。他方、既成のパターンを追うことで終始して、オリジナリティが見つけにくかったものもいくつかありました。

- せっかく工夫してこだわりが積み重ねられてきたのに、後半に続かない、あるいは何処かで見たユニゾンなどの展開から時間切れのようにして最終シーンが貼り付けられていて、テーマが見失われていたものもありました。たくさんのことを盛り込み過ぎて焦点がぼけてしまったり、バントマイムなどによる説明にとらわれ過ぎてダンスそのものが置き去りにされてしまったりする作品もありました。テーマそのものは大変面白くても、壮大すぎたり、抽象的過ぎた、特殊すぎたりすると、持っている身体・動きとの開きが大きくなってしまい、表現したかったことは伝わらずに終わるようです。発想を具体的な動きのフレーズにまで繋げていく、テーマを反映した動きの研究をしましょう。
- 毎年感じるのですが、素敵なフレーズや力強い表現が見つまっているように見えるのに、身体づくりが伴わないためにそれが活かされずに終わっている残念な例が多いようです。基礎練習は退屈に感じるのかもしれませんが、今ある自分を超えて新しい表現をする上でも、日々の鍛練を通して自由な身体、強い身体を手に入れてください。例えば、ダンスでは脚を上げなくてはならないから脚を上げるのではなく、この作品のここで身体中が思い切り爆発する表現がしたい、というときにそれが実現できる身体が大切です。
- 動き出す直前や動き終わりの気持ちの途切れは、せっかく積み上げている作品世界を打ち消してしまい残念でした。フレーズ単位で動きを習得できたら、もう一つ大きな場面単位でひと流れに踊ること、それができたら作品を通してひと流れで感じ踊ることへと、ブラッシュアップできると良いと思います。
- 位置取や動き出しのタイミングを気にするあまり、目が泳いだり、その結果動きがギクシャクしたり、というようなことは、避けたいですね。作品に慣れていない時期には、目で見て揃えたり、カウントを数えてタイミングをはかったり、ということも必要でしょうが、グループ内での日頃のコミュニケーションをよくして、周囲を感じて踊るトレーニングを沢山してほしいな、と感じました。そうすると、位置取りやタイミングも身体で感じあって、自然とベストなところを見つけられるようになります。
- 小道具や衣装を使うことで精一杯という作品もいくつかありました。客観的な目で全体を見て、本当に自然に動きに溶け込ませるよう、あるいは意図した印象を高められるよう、小道具や衣装デザイン、特別な化粧の意味合いを十分に研究して取り組むことが必要だと感じさせられました。

【ソロ・デュオの部】

- トレーニングが行き届いたダンサーと、今頑張っている最中というダンサーとが、入り混じっていた印象です。
- 作品の作り方として、どんなに高度なことができるかという技術の羅列となってしまって、テーマの表現から遠ざかってしまった例がありました。どの作品にも出てくるような流行りの動きをつなげて行っていると、規定演技のように見えて、作品テーマが見えてこない、ということになります。表現と技術の関係をしっかり見つけてください。
- 表現を届けようと思うあまりにずっと息の詰まる緊張が続くダンサー、作品もありました。間をとった、肩の力が抜けた動きがうまく使えると、スピード感の変化やメリハリとなってみずみずしい表現を生み出すようです。こうして身体の隅々まで呼吸が行き渡っているダンサー・作品では、技術と表現が融合し、テーマの厚みを感じることができていたし評価も高かったようです。

最後に

審査員室では、たくさんの意見と感想が飛び交い、とても熱い審査となりました。これだけたくさんの素敵な作品、将来有望なダンサーたちに出会えて、本当に幸せな一日を過ごすことができたこと、大きな喜びに包まれました。専門ジャンルの異なる審査員が集いましたが、議論を交わしてみると、大事にしている点は同様に、高く評価される作品・グループに大きな違いは見られません。つまり、ダンス・身体表現の肝は、ジャンルを超えて共通だということ、審査員も学ばせていただきました。来年もまた、さらに豊かになった、さらに鋭くなった、皆さんの作品世界と出会えることを楽しみにしています。活動の充実をお祈りしています！

審査員一覧

- ◎八木 ありさ（日本女子体育大学教授）
- 森 立子（日本女子体育大学教授）
- 中村 恩恵（舞踊家）
- 二見 一幸（舞踊家）
- 三井 聡（ダンサー・振付家）
- MEDUSA（ダンサー・振付家）